

萬葉以前

—— 上代びとの表現 ——

小島憲之

岩波書店

萬葉以前

一九八六年九月一日 第 刷發行 ©

定価三八〇〇円

著 者 小 島 憲 之

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目
株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三・一六五・四二二
振替 東京六二六三三〇

印刷・三陽社 製本・三水舎

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-002141-9

目

次

序章……………一

第一章 太子聖徳の文藻……………九

第二章 近江朝前後の文学その一……………六二
——詩と歌——

第三章 近江朝前後の文学その二……………一〇三
——大津皇子の臨終詩を中心として——

第四章 文字の揺れ……………一四七
——天武飛鳥朝「新字」撰定の周辺——

第五章 『古事記』周辺……………二〇九

第六章	上代官人の「あや」その一	二六五
	—— 外来説話類を中心として ——	
第七章	上代官人の「あや」その二	三〇七
	—— 「類書」をめぐる ——	
第八章	海東と西域	三三九
	—— 啓蒙期としてみた上代文学の一面 ——	
補 説		四〇九
あとがき		四一九

序

章

七・八世紀のわが上代文学、それはすべて「漢字」という文字の中に在る。

漢字は文学を成立させる一種のてだてである。その織りなす糸のあやは縦に横に実にはひろく且つ深い。しかも表意性をもつ漢字の筆画を宙で覚えることは、なかなかむつかしく、厄介な点を含む。わたくしに限っていえば、毎年テレビのニュースの語りの中に出現するケイチツのこと。三月五日前後に冬ごもりの虫はい出るというこの日、ケイチツとは、「さてどんな漢字であつたか」、辞書を引きつつ文字を確かめるのが毎春の習性となっている。

しかし一方では、筆画の難易にかかわらず、字形字義などを異にする漢字の姿は、人それぞれにいろいろと想像の空間を与えもする。漢字は各自その出自を別にし、また違った味の陰翳を投げかける。たとえば、字をつらねて熟合した「餘春」と「残春」、両者に共通するものは、晩春より初夏へかけての「残んの春」である。しかも気温風雨などの変りやすい春という時節の中に、花などのやぶれ残ったまま敗残の様相を呈し、人に痛ましさを感じさせるのが残春であり、そこには餘春とちがって作者の深い感情がこもる。

このような性格をもつ漢字の中に包まれたのが上代であり、上代人じょうだいにひとによって漢字で以て表現され

たのが上代文学である。いわば、その文学は、よかれあしかれ漢字と共に「あゆむ」というべきである。

上代文学は漢字と共に展開する。しかしこの漢字伝来以前のわが国の文学、というよりは文字を伴わない低い度合の「あや」は、すでに口承オウラル(口頭)の世界に存在していたのである。口で語り口で歌い、これを耳で楽しむといった相互共同の表現は、漢字のみに限定すべきではない。しかしこれらの口承に関する資料は、きわめて少ない。嘗ていち早く西洋古典学者 T. G. Winner の著の一部を紹介したことがあるが、その中央アジア草原に住むカザック族(the Kazaks)の口承資料ほどのよい例は、わが国には残らない。⁽¹⁾従って、わが上代文学においては、『古事記』『日本書紀』『風土記』『萬葉集』などの中より、口承的な部分を抽出しつつ、消え去った口承のあやのゆくえを想像するよりほかはない。

章

序

その代表的なものに『古事記』がある。近世以来、それはすべて「語られたもの」とみなされてきた。漢字化された現存『古事記』の本文を暗誦し、声を張りあげて海のかなたに向かって吐くとするれば、約三時間(?)はかかるという。一昼夜を優に越えて恍惚のうちに歌われるアイヌの歌謡ユーカラのことを思えば、非文字時代の人々にとっては、『古事記』くらいの長さなら口承は容易で

ある。しかし現存『古事記』は、口承性を帯びながらもこれと全く性格を異にする漢字という筆の働きによって成立したことを忘れてはならない。ひと続きの口承性を帯びた部分さえも、その多くは甲の伝承と乙の伝承をつなぎ合わせたものと推定され、もともと連続して語られたものではなかった。

口承の部分は「場」を異にする場合が多い。甲と乙をつないで長い「語りもの」にするには、「繋ぎ」の技法が必要である。繋ぎの方法は過去の華やかな映画の中によく用いられたモンタージュにも似通う点が見られるが、その総まとめはやはり編集技術による。兄弟八十神たちが大国主の神に国を譲る理由をものがたる「稲羽の白兔」の神話を例にすれば、その文脈は、

みな国は大国主の神に避りまつりき。避りまつりし所以は……（上巻）

とみえる。これは結論を先行させ、次に理由をあれこれと述べる手法であるが、恐らくこれは口承の世界にはなく、むしろ『古事記』が漢訳仏典類の伝来以後その技法を採用した結果であるう。口承物をつなぎ合わせるまでのことが太安萬侶の大きな役割であって、成書の完成までには編集のために漢籍に眼を開いたのであった。本居宣長の『古事記』研究がわが学問史上不朽の業績を示すことは万人の認めるところ。しかし繋ぎの部分にすこしの矛盾も感じないで、

誰云出し言ともなく、ただいと上代より、語り伝へ来つるままなり（『古事記伝』一之巻）

と述べるが、これは長い歳月にわたってあまたの学者を誤らせてきたのである。

上代文学という漢字の海中には口承性をもつ島々が見え隠れする。『古事記』のみならず、『出雲風土記』意宇郡の「国引き」の条の如く、口承性の濃い部分も残る。また記紀歌謡や『萬葉集』などに出現する枕詞のうち、伝承性を帯びる「定着した修辞」(fixed epithet)の背後には、口で伝えられた説話伝説の精や文字をもたない古代人の心性を反映したものもみられる。しかしこれらの島は海の景観を色どる異質的なものであり、海の本質を大きく変えるものではない。しかもその口承性を帯びた異質的なものさえも一旦筆の中に残存する以上、そこには筆のあやによって変えられた点の多いことも想像しえよう。ゆえにそれらの口承性の部分も本来の純粹的なものではない。やはり上代文学は、漢字という文字のなせるしわざの中にその中心点があるといふべきである。

漢字で表現された上代文学は、朝廷を中心として誕生する。筆を取る有識者、すなわち朝廷をめぐる皇族、官人、更にまたそこに筆を以て仕える渡来人たちが、相寄ってまずあやを織り始める。このうち金石文のたぐいも多少ありはするものの、あやをもつ表現とみなすべきものは、七世紀初葉の推古期、その代表者聖德太子の文藻以来とみて誤りはない。以後八世紀を経て、少なくとも平安朝九世紀初葉までに成立した『萬葉集』まで、上代人は漢字によってものを表現し続ける。こう

した一端については、すでにわたくしなりの旧著がある⁽⁴⁾。しかし以後二十年近くの歳月の経過は、過去の学問的爲事についての反省と検討とをしきりにうながす。

この小著の構えとしては、両三の旧著に述べたことはなるべく繰返さないことを建て前とし、それ以後すなわち最近十数年間に発表した小論の一群にかなり多くの補訂を加え、上代文学の全貌ならぬその一斑、特に問題点を含む部分を追求しようとする。書名に『萬葉以前』と名付けるのは、韻文の一大詞華集『萬葉集』を除外し、散文を中心としたことによる。尤も「萬葉以前」といっても、必ずしも時代がそれを溯ることを意味しない。それは『萬葉集』の歌も七世紀以前の作とみなし得る例もかなり残るわけであり、この書名は必ずしも厳密ではない。とはいえ、『萬葉集』を除き、奈良朝八世紀ごろまでの散文、及びひろく上代人の表現態度を眺めようとするこの書に『萬葉以前』と銘打つことは、一般書名としてはかつがっ許容されるであらう。

小著の前半の章は、七世紀初葉の推古朝の文藻より近江・飛鳥藤原朝を経て、八世紀初葉に至るまでの文学上の問題点を取り上げる。更に後半の章においては、上代の官人たちの表現について、大摺みに考察を加え、そのあやの傾向を捕えようとする。なお上代官人の表現の糧、その素材源には、漢籍のほかに辞書類があり、特に梁人顧野王撰の『玉篇』の活用はいちじるしい。しかしこれらの問題は、萬葉・古今のあやとともに「残し柿」として今後を待とう。『萬葉以前』は、『萬葉以

後』を遥か彼方に相予想する。

- (1) 拙稿「口と耳との世界」(『国語教室』第九号)参照。Winnerの原著は、『The Oral Art and Literature of the Kazakhs of Russian Central』(1958)。
- (2) 同「古事記の文体」(『国語国文』第二十卷三号)、「古事記の「ねらひ」——其の文体論的考察より——」(同、第二十三卷二号)など参照。
- (3) C. M. Bowra: "Heroic Poetry" (1952) 第六章「コンポジションの技法・言語」参照。
- (4) 拙著『上代日本文学と中国文学』(上・中・下。下巻は昭和四十年三月刊)、及び続刊中の『国風暗黒時代の文学』(上巻は昭和四十三年十二月刊)など。

第一章

太子聖徳の文藻

七世紀の初葉は、すなわち女帝推古の世に当る。憲法十七条、伊予の国湯岡の温湯碑文などの述作がものされたのは、ひとえに太子聖徳をめぐる太子顧問機関の人々の参与と力量とによる。当時、海の彼方に君臨するのは、南北を統一した隋の朝廷。煬帝を上に戴くその大国の放つ文化の光は、朝鮮半島高麗・百済の学僧積家たちの渡来と共に、東海の国日本に向かって投射する。

太子は、『日本書紀』(推古紀)という「日本」を意識した史書の中に存在する。史書史料などに関して論ずる「史学」は、現代の学問上の部門別に部分けをするならば、「文学」とはかなり対称的な位置に立つ。『明六雜誌』第二十五号に所収する、明治の思想家西周の「知説」に、早くも、

凡ソ百学ノ中ニ就テ、普通ノ学ト称スベキハ、文数史地ノ四学ナリ、此四学ハ専ラ心理ト物理トニ属セズ、反テ此兩理ヲ記載解釈スルノ具タル者ナリ、然ドモ中ニ就テ文ト数トハ心理ニ本ヅキ、史ト地トハ兩理ヲ兼ルノ形質アリト雖ドモ、畢竟普通トスルノ約ナルニ如カズ(濁点筆者)

と述べるのは、「史」と「文」の二つの学を認識した上での論とみなし得る。現今、常識的にみて、前者は冷徹なる文化科学であり、後者は氣ままに「あや」の世界に遊ぶ物学びの学といえよう。

「あや」とは、「筆のあや」を指す。これは、『文選』卷十七の陸士衡「文賦」にみえる盛藻・麗藻などの「藻」に当る。⁽¹⁾李善注によれば、「藻」とは、

孔安国尚書伝に曰く、藻は水草の文ある者の故に、以て文に喩ふと(盛藻)注

の意。文すなわち文章を水草の藻の「文」(彩色)にたとえたものをいう。「学令」講説不長条に、学生の学ぶべきことを規定した「文藻に關ふ」の条文について、延暦ごろの成立にかかる『令釈』に「文藻は文章なり」と注し、更に溯って天平十年ごろに成立した『古記』に「文藻は文章一種(文章に「様の意」を謂ふなり)」と注するのち、「文賦」の例と同じ方向をもつ。

太子がこのたぐいの文に理解を示していたか否かはしばらく置くことにして、仏典義疏類にも「文」の語例がみえる。敦煌本『勝鬘義疏本義』の残存する現在、太子撰述についての一抔の不安も残る『勝鬘經義疏』、その中にも「文」の例をみる。序説の中の、

如是といふは、總じて一教の始終を挙ぐるなり(如是者、總挙一教之始終也)

両物の相似するを如と曰ひ、一物の非なきを是と曰ふ(両物相似曰如、一物无レ非曰是)

如来と阿難と、其の声口を談ずれば、必ず一と八と既に殊にあり、金と肉と同じきにあらす。

故に文に於て如と曰ふ(如来与三阿難、談其声口、必一八既殊、金肉非レ同。故於レ文曰レ如)

一と八と金と肉と異にありと雖も、即ち其の所明は即ち是れ一物なり。故に理に於て是と曰ふ